

令和3年8月吉日

日本産婦人科・新生児血液学会会員各位

日本産婦人科・新生児血液学会理事長 大賀正一
ビタミンK製剤予防投与検討作業チーム
高橋幸博、川口千晴、西口富三、白幡 聡

お 願 い

コロナ禍でなにかとご苦勞の多い毎日と拝察します。

さて、新生児・乳児ビタミンK欠乏性出血症につきましては、2次性症例の発症予防も考慮の上、2010年に改訂ガイドラインを發表しました。しかし、週1回3か月までビタミンK製剤を投与する方法の有効性エビデンスが不十分とする意見や、家庭で投与することの安全性が担保されていないとする意見をうけて一部修正され、現在、我が国では、出生時、産科退院時、1か月健診時の合計3回投与する方法と、3か月まで週1回投与する方法が実施され、後者についてはその後の経験の蓄積の中でさらに評価する方向となっていました。

この度、日本小児科学会新生児委員会では「新生児・乳児ビタミンK欠乏性出血症に対するビタミンK製剤の現状調査」を実施し、その結果が日本小児科学会雑誌（125巻：99～101頁、2021年）に報告されました。本調査では、頭蓋内出血例だけに限定していますが、報告のあった13例中、合計3回投与が11例、その他および不明が各1例で、週1回投与を受けた乳児の中から発症例の報告はありませんでした。合計3回投与を実施している施設が55.6%、少なくとも母乳栄養児には週1回投与を実施している施設が25.6%と前者が2倍多いことを考慮しても週1回投与の方が、ビタミンK欠乏による乳児の頭蓋内出血の予防効果が高いことが示唆されます。また、家庭での投与では、当然、飲み忘れがあったと推測されますが、1例も本症発症の報告がなかったことから、アドヒアランスの低下が大きな影響を及ぼすことはないと推測されます。但し、今回の日本小児科学会の調査では、誤嚥など家庭内投与に伴う有害事象の有無については全く調査されておりません。

そこで、本学会では、全会員の中で、週1回投与のご経験をお持ちの先生方に、有害事象の経験の有無を調査させていただくことにいたしました。先生方のご報告をもとに、安全性を担保して、乳児ビタミンK欠乏性出血症とくに予後に大きな影響を及ぼす頭蓋内出血の撲滅に取り組んでゆきたいと思っております。

尚、ご多忙中のところ、恐縮ですが、9月15日までにご返事いただきますようお願い申し上げます。